

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 18 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520166

研究課題名(和文)性の解放と資本主義 - 労働力の均質化をめぐる表象文化論的考察

研究課題名(英文) Sexual Liberation and Capitalism: Cultural Representative Study on Homogenizing Labour

研究代表者

越智 和弘 (Ochi, Kazuhiro)

名古屋大学・国際言語文化研究科・教授

研究者番号：60121381

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円、(間接経費) 420,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果として、「労働力均質化時代における性と文化」を題目に、年度ごとに立てた研究内容「支配文明の基本構造」、「性の解放と資本主義の精神」、「性の思想化と脱肉体化」に従い、年に2篇ずつ計6篇の論文を計画通り発表した。研究を進めるなかから、労働力を均質化する資本主義の20世紀的な徴候が脱肉体化した人間関係を生みだした事実が判明した。脱肉体化した社会を「不在の美学」という観点から芸術的創造に結びつけたレベッカ・ホルンと、脱肉体化したメディア社会を思想的に分析したヴィレム・フルッサーが必然的に次の考察対象として浮かび上がり、それが科研費「脱肉体化時代の美学的考察」の獲得へと結びついた。

研究成果の概要(英文)：As a fruitful result of the study six essays on the theme of "Sexus and Culture in the Age of Homogenizing Labour" were published. They consisted of, according to the plan stated for each year under the subjects, "The Structure of the Dominating Civilization", "The Sexual Liberation and the Spirit of Capitalism", "Philosophising Sexuality and Decorporalization". The conclusion of the study i.e. the homogenizing function of capitalism in the 20. Century inevitably lead to the decorporalization of human relationship, newly opened the door to focus on Rebecca horn as an artist who realizes the aesthetic of absence, and also to Viém Flusser who analyzed the decorporalized media oriented society. This lead to the successful acquisition of the further grant under the theme of "Aesthetical Study in the Age of Decorporalization".

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術一般

キーワード：労働力均質化 資本主義の精神 系統発生論 性の思想化 脱肉体化 超自我の変容

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初の背景は以下のとおりであった。

研究の学術的背景

【学術的重要性・妥当性】

西欧という、地球規模でみると限られた地域で宗教改革を機に誕生した近代資本主義が、いまやグローバルな規範と化していることは、否定しがたい事実である。しかしそれではなぜ、アルプス北方地域で生まれ、北米アメリカへ伝播するなかで大きく発展していった宗教に源泉をもつ諸価値が、西欧を支配文化に高めるまでの力を持ち得たのかについては、個々の領域に分散した研究を除いては、これまでほとんど語られてこなかった。研究代表者は、芸術社会学、表象文化学、芸術思想史などから得られる知識を踏まえつつ、女性のセクシュアリティと禁欲倫理の変遷に焦点を当てることで、西欧近代が発展し得た真の原因を探る研究を一貫して進めてきた。本研究は、これまで得られた知見をもとに、性を抑圧することで労働のエネルギーを生みだしてきた西欧社会が、なぜ20世紀後半期にいたって、性と女性の解放運動を許容したのか、それによってなぜ資本主義は弱体化しなかったのか、という、いまだ問われたことのない視点から資本主義のメカニズムを解明することを目標とする。本研究がもつ学術的重要性は、まさにこの点にある。

西欧が世界に規範を提供しうる文化となり得た理由が、性的快楽に結びつく要素を、他の文化にみられない規模で抑圧する術を編み出したことにあるとする考えは、基本的文献を通し得られる知識でありながら、これまで意外なほど語られてこなかった。その意味で、本研究は、文学、哲学、社会学を中心とする古典から最新の文献にいたる研究成果を丹念に読み解く中から、新たな視点を構築しようとするものであり、基盤研究としてきわめて高い妥当性を有する。

【独創性・革新性】

かつてフロイトは、文化が進歩するためには、欲動の断念と快楽への罪責感の強化が不可欠だと述べた。¹⁾ 性的快楽への罪責感をかきたてる厳格な倫理観を、16世紀以降、世俗化の名のもとに浸透させたことにこそ、西欧近代が発展した鍵が見いだせることを考えると、いまだ多くが触れられない禁欲の歴史と向き合い、それを、女性のパフォーマンス・アートを水先案内役に、資本主義がグローバル化へ舵を切った時期と、性の解放運動が起きた時期が重なることの意味を解き明かそうとする本研究は、類をみない独創性に満ちたものである。同時に本研究は、これまで普遍化されてきた西欧文化の本質を、相対化していく姿勢に貫かれていることから、日本が将来に向けた独自の進路を見いだすうえで、必ずや革新性に満ちた知識を提供するはずである。

【波及効果・普遍性】

今や近代そのものの本質に関わる限界が叫ばれて久しい。西欧近代がもたらした恩恵を否定するわけではないながらも、その限界性を乗り越える新たな道を見いだすには、これまで目をそらされてきた西欧文化を支えてきた根幹、すなわち性に対する他の地球上のいかなる文化とも異なる考えと真に向き合うことが不可欠である。ミシェル・フーコーは、西欧近代は真理を探究する姿勢を示しながら、じつは性に関してのみ、その解明を一貫して回避してきたことを教えてくれた。²⁾ 本研究は、この普遍性の高いシエマを継承しつつ、性の解放がじつは禁欲の新たな形態の始まりであった可能性を究明することを目指す。ゆえに、その波及効果は絶大であると信じる。

研究期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか

本研究は、科学研究費を受け過去3年間にわたり推し進めた研究(課題「女性的他者を抑圧する西洋的特性」)と、その成果をまとめた著書³⁾において確立された方向性を、基本的には継承するものである。しかし、その後にも育まれた見知と新たな問題意識に基づき、性の解放が性差を超えた労働力の均質化に貢献したことの解明に重点をおく。研究期間は、当面3年間を予定する。

研究に画期的な進展をもたらしたのは、2006年にアメリカの研究グループが金融機関向けに作成した「世界の文化地図(Cultural World Map)」³⁾との出会いであった。この地図が示す興味深い点は、資本主義が最も円滑に機能する地域として色分けされているのが、21世紀に入った今日においてもなお、アルプス北方のヨーロッパ地域と北米英語圏に限定されていることである。この限られた地域は、歴史上隔たってはいるものの、以下の三つの現象が顕在化した地域として重なっている。その一つは、16世紀に起きた宗教改革の成果を受け入れプロテスタント化した地域であること。二つ目は、20世紀の後半期に性の解放からフェミニズムへという若者のセクシュアリティをめぐる反抗運動が激しく勃発した地域であること。そして三つ目は、プロテスタント的倫理観が浸透した地域に通底するものの考え方として、ドイツを中心に生まれたロマン主義的な性格が、現代にいたるまで影響を及ぼし続けている可能性が高いことである。

一見すると関連のなさそうなこれらの諸現象は、それらが「世界の文化地図」が示しているように、すべて資本主義を効率よく機能させる前提が整った地域で起きていることが判明した時点で、本研究が解明すべき範囲を自ずと規定することになる。それは、資本主義の発展にとって不可欠な役割を果たすプロテスタント的禁欲の倫理がもっとも浸透した地域において、抑圧されてきたはずの女性のセクシュアリティが、1960年代以降解放へ向かった意味は何か。本当に性は解放

されたのか。それは資本主義の動態にかなる変化をもたらしたのか、である。

当該分野における本研究の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

本研究は、本来文学研究を基盤に出発したものである。しかしその範囲は、広く芸術思想史から芸術社会学までを横断的に取り込んだ成果を、学際的に網羅しつつ進められるため、旧来の学問領域には容易に納まりきれない面がある。しかしそれはけっして奇をてらったものではない。今日世界中を覆い尽くし、人間をあらゆる面から支配し束縛している資本主義の激しく変容しつつある力学を、性の解放という、これまでにない観点から捉え、真理を明るみに出すため必然的に編み出された独創的な方法論である。その特色は、資本主義はその本質的な性格上、巨大化しつつもやがて自己破壊への道をたどると予言した哲学者ヘルベルト・マルクーゼの説³⁾を真摯に受けとめつつ、しかし次世代を担う者たちに、性と資本主義をめぐる新しくも深刻な見知を提供することで、それぞれが置かれている情況への理解を深め、生き延びる道を見いだす一助としたいという意志によって貫かれていることにある。

本研究によって予想される結果は、けっして楽観的なものではない。それは、性の解放運動が起きてから40年余りを経た今、当時あれほど熱く希求された性を解放することの意味が、今日ではほぼ忘れ去られ、なぜそのような運動が起きたのかさえ理解されにくい現状があることに、如実に表れている。当時、抑圧する体制への反抗とみなされた性の解放運動が、じつはセクシュアリティのセックスへの還元を経由し、性差を超えた労働力の均質化をもたらすために不可欠な段階であったことを解明することに、本研究の最大の意義がある。

<引用文献>

1) Sigmund Freud, *Das Unbehagen in der Kultur*, Studienausgabe Bd.IX, Frankfurt am Main 2000, p.227.

2) Michel Foucault, *The History of Sexuality: An Introduction Volume I*, New York 1978, p.55.

3) 越智和弘、『女性を消去する文化』、鳥影社、2005年。

4) Ikuko Atsumi, MA/Ph.D.eq. & IBC Group, *Cultural World Map*, 2006, Multicultural Playing Field LLC, PO Box 795, Rumson, NJ 07760-0795, USA.

5) Herbert Marcuse, *Eros and Civilization: A Philosophical Inquiry into Freud*, Boston 1966, p.83.

2. 研究の目的

1960年代に西欧で起きた性をめぐる意識の変化と、それが資本主義と性差におよぼした影響を、女性のパフォーマンス・アートを

対象とした表象分析を通して解明することが、本研究の目的であった。20世紀後半期が近代資本主義の大転換期に当たり、それが性の解放を機に誘発されたことを教えてくれたのは、女性の身体パフォーマンスであった。彼女らを果敢な創作へと駆り立てた理由が、西欧で長きにわたり抑圧されてきた女性のセクシュアリティにあったことを知るなかから、欲動の断念とその昇華を通し、労働力を産出することで発展してきた資本主義が、なぜ1960年代に至って性の解放を許容し、またそれを必要としたのか、という研究への問題意識が確立したのである。

3. 研究の方法

1960年代後半期に起きた性の解放を、マックス・ウェーバーがいう「脱魔術化」を旗印に展開してきた資本主義に、「再魔術化」という新たな方向性が顕在化した証として位置づける研究が、近年、社会学の方面から活発に提示されつつある。本研究は、再魔術化の視点を参考にしつつも、それを単に消費や宗教観の問題としてではなく、禁欲を糧に生みだされる労働の性格をめぐって起きた画期的な変容として解明していく方法によって進められた。それに従い当初の研究は、大きく三つの重点項目に分けて進めるべく計画された。1) 資本主義の展開を、女性的快楽の抑圧という観点から批判的に検証する。2) 女性芸術家の意図とその成果を、パフォーマンス・アートと思想の双方の観点から、ドイツにある重要な拠点に赴いて調査する。3) 性と女性の解放運動が、労働力の均質化におよぼした真の影響が何であったのかを明らかにする。

平成23年度

初年度の目標として掲げられた、労働力の均質化を生みだした西欧の支配文明としての基本構造を明らかにすることを目指して研究は進められた。地球上に数ある文化のなかで、どうして西欧だけが普遍性を主張する支配文明となりえたのか。研究は、これまで多くが当然の前提として見過ごしがちであったこの疑問への答を模索するなかから、西欧だけが世界に規範を提供する支配文明となりえた理由の核心を、諸文化の固有性や差異を超えた「だれもが参加できる制度」を生みだしたことに見いだした。その観点に基づき、支配文明を、特定の地域や民族に限定されず一定の知識と能力さえもてばだれもが参加しうる人間関係を生みだしたことにあると定義した。その上で、この「だれもが参加しうる人間関係」こそが、じつは近代資本主義なのだ位置づけた。つぎに研究は、資本主義がアルプス北方ヨーロッパに生まれ発展しえた理由には、この地域にしか存在しない特殊性が介在しているはずだという仮説のもとに、それが何であったのかを解明することをつぎの課題とした。その結果、16世紀に資本主義を生みだし、そこからやがて労働力の均質化を

宿命づける制度を、5世紀近くにわたり発展させてきた西欧文明の核心には、フロイトが展開した超自我をめぐる言説が大きく関与している可能性に気づいた。性的な活動を断念させ、代わりに労働への意欲を産出するための監視法廷としてある超自我がもつ厳格さは、けっして普遍的に有効なものではなく、北方ヨーロッパの厳格な自然環境においてこそその必然性が認められるものである。となると、普遍を主張する支配文明は、じつはきわめて特殊限定的な環境条件の中から生まれたことになる。この事実を踏まえた上で、それでは西欧はいかにして「だれもが参加できる制度」へと転換しえたのか、そのためには何が必要であったのかを考察することを次年度の課題と定めた。

平成24年度

西欧が今日支配文明になりえた最大の理由が、資本主義を「だれもが参加できる制度」として発展させた事実に見いだせる、という研究初年度に得られた成果を踏まえ、研究次年度においては、資本主義を支えてきた性的悦楽を憎悪する精神と、資本主義がもっとも浸透し発展した地域において、20世紀後半期に性と女性の解放が要求されたことの矛盾を解明することが、課題として掲げられた。問題の在処を明確にするために、「世界の文化地図」という資料を用いる方法がとられた。それによると、今日資本主義を機能させる条件がもっとも整った地域が、地球規模でみるとヨーロッパ北方と北米英語圏に依然として限定されている重要な事実が判明した。そのうえで、1960年以降、性と女性の解放運動が激しく勃発した地域もまた、この資本主義がもっとも発展した地域として「地図」が示すプロテスタント文化圏とみごとに重なっている事実が確認されたのである。

。 厳しい禁欲を実践することで発展してきた資本主義世界において、性と女性の解放が世界に先駆けて叫ばれるようになった理由を解明する方法として、研究は、女性の現代アートを取り上げた。こうした方法を選択した理由は、かつてハイデッガーが『芸術作品の根源』で述べたように、理屈では容易に理解しがたい人間がおかれた真の立ち位置を心に響くかたちで訴えるうえで、芸術が他には代えがたい手段を果たすと考えたからである。その意味で女性アーティストのパフォーマンスが表象しているのは、資本主義世界における性と女性がおかれてきた世界そのものであった。ただ本研究は、性と女性が抑圧から解放されたことを評価する視点に留まる方法はとらなかった。なぜなら、60～70年代に切実な問題であった性解放の必然性は、そのわずか数十年後にはまったく理解されなくなってしまったからである。そこから本研究は、じつは若者の主体的な運動としてとらえられた性の解放も、じつは、女性的他者を均質化

された労働力として取り込むために資本が仕組んだ戦略であったのではないか、という問題提起をするに至ったところで研究二年目の区切りを付けた。

平成25年度

研究初年度において、西欧が支配文明になりえた理由を、資本主義を「だれもが参加できる制度」として発展させた事実に見いだしたこと、それを受け次年度において、性的悦楽への憎悪を動力源に、資本主義をもっとも発展させえた地域において、20世紀後半期に性と女性の解放が要求された事実から、資本主義の発展と性の解放のあいだには、変革への主体性を超えた別種のダイナミズムが働いた可能性が想定されることが判明した。研究最終年度においては、性の解放運動が単なるセックスの解放を唱えただけに留まらず、1960年代当時の若者たちが、性を哲学的に根拠づけようとした事実に着目することを起点に、このいわゆる「性の思想化」の内実と、その評価に取り組んだ。研究の具体的方策としては、性の解放を理論的に根拠づけた哲学者として当時の若者に評価されたマルクーゼの著『エロスと文明』を取り上げ、その分析を行った。さらに三年目の研究は、パフォーマンス・アートという表象を対象に、性の解放が資本主義の展開におよぼした影響を分析してきたこれまでの成果を、海外の先端的研究機関の研究者との交流を通し、さらに深めることに重きをおいた。具体的には、性をめぐる思想と芸術を結びつけるうえで、研究最終年度において二つの大きな発見がみられたことが、その研究方法を方向づけた。それらは、人間から肉体性を奪いプログラムされたもはや制御不能に陥った現代社会を読み解いた思想家ヴィレム・フルッサーと、抑圧され不在化した肉体を一貫したテーマとして表現しつづける芸術家レベッカ・ホルンとの出会いであった。それに従い最終年度における本研究は、上記両者の資料が存在するドイツのベルリン芸術大学のヴィレム・フルッサー・アーカイヴを訪れ資料収集を行うことと、ミュンスター市が管轄するホルンの作品『反時計回りのコンサート』を現地に赴いて視察する方法がとられた。

4. 研究成果

【総合的成果】

本研究の成果として、「労働力均質化時代における性と文化」を題目に、年度ごとに立てた研究内容「支配文明の基本構造」、「性の解放と資本主義の精神」、「性の思想化と脱肉体化」に従い、年に2篇ずつ計6篇の論文を計画通り発表した。さらに関連する論文2篇を発表したことを加えると、研究期間中に発表し得た論文は8篇に上る。研究を進めるなかから、労働力を均質化する資本主義の20世紀的な徴候が脱肉体化した人間関係を生みだした事実が判明した。脱肉体化した

社会を「不在の美学」という観点から芸術的創造に結びつけたレベッカ・ホルンと、脱肉体化したメディア社会を思想的に分析したヴィレム・フルッサーが必然的に次の考察対象として浮かび上がり、それが平成26年度以降の科研費「脱肉体化時代の美学的考察」の獲得へと結びついた。

【年度ごとの具体的成果】

平成23年度

研究課題である労働力均質化のメカニズムを解明するうえで、最初の課題であった西欧支配文明の基本構造についての分析を、「労働力均質化時代の性と文化 I. 支配文明の基本構造(1)」と「労働力均質化時代の性と文化 I. 支配文明の基本構造(2)」という二つの論文にまとめた。これらは、数ある世界の文化のなかでも、西欧文化のみが支配文明の高みに上り詰められた理由を、「だれもが参加しうる」普遍的機制として資本主義を生み出したことに見だし、しかし同時に、資本主義誕生の契機をなした禁欲の世俗的浸透が、けっして普遍的価値の普及を目指したものではなかったという矛盾に焦点を当てて議論するものであった。さらに、日本独文学会からの執筆依頼を受け、論文「肉体液状化の恐怖-68年世代とナチスを結ぶファシズム身体論」と、他の科研分担者としてではありながら、本研究テーマにとり重要な意味をもつ去勢恐怖と超自我の関係を、論文「去勢恐怖とユダヤ人憎悪-フロイトの超自我をめぐる系統発生的文化論」としてまとめた。これにより、当初の研究計画が初年度に目指した内容は十分に達成できたのみならず、支配文明の基本構造を解明しえた後に想定される、性的禁欲と超自我をめぐるドイツの特殊性の解明へ向け重要な方向性が見いだせた。

平成24年度

性的悦楽への憎悪を動力源に、資本主義をもっとも発展させえた地域において、20世紀後半期に性と女性の解放が要求された事実から、資本主義の発展と性の解放のあいだには、変革への主体性を超えた別種のダイナミズムが働いた可能性が想定されることが判明した。その観点から研究次年度においては、労働力均質化のメカニズムを解明するために、禁欲を至上命令とする資本主義の精神と20世紀後半期に起きた性の解放との矛盾の解明をめぐる「労働力均質化時代の性と文化 II. 性の解放と資本主義の精神(1)」と「労働力均質化時代の性と文化 II. 性の解放と資本主義の精神(2)」という二つの論文を書き上げたことが、成果としてあげられる。一つ目の論文は、資本主義が円滑に機能するために欠かせない情報と契約への信頼を最優先に実践する人びとが暮らす地域が、いまだ地球上では限られている視座に立ったうえで、じつは20世紀後半期に性の解放運動が勃発した地域もまた、これらプロテスタント文化圏とも言い換えられる地域と重なっていることに着目し

た。この一見矛盾する関係を解く鍵が、女性アーティスト、キャロリー・シュニーマンの作品『胎内からの巻物』において体現されていることを示したうえで、このような性と女性の解放を唱える風潮が、21世紀にはいると理解不能になっている不可思議な現実を指摘した。二つ目の論文は、主体的に引き起こされたかに思われてきた性の解放運動が、じつは資本主義が新たな段階に至るための通過儀礼のごとき機能を果たしたのではないかという問題提起から始まる。そのうえで、性の解放が1960年代に勃発するうえで、その舞台を準備した三つの要素について論じた。これらの要素は、歴史的偶然であるか見えながら、じつは、女性的他者を資本のスタジアムに取り込むための条件を整えるうえで不可欠な役割を果たしたことが判明する。女性と非西欧人を均質化された労働力に変換するためには、女性の領域として存在し続けてきた性と官能の世界を、男性的価値によって測定しうるものへと還元する必要があったことが、論文の成果として判明した。

平成25年度

研究最終年度においては、性の解放運動が性を哲学的に根拠づけようとした事実に着目し、このいわゆる「性の思想化」が、やがて「性の脱肉体化」への道を開いたことを解明する成果として、2篇の論文「労働力均質化時代の性と文化 II. 性の思想化と脱肉体化(1)」と「労働力均質化時代の性と文化 II. 性の思想化と脱肉体化(2)」を上梓した。両論文は、性の解放を理論的に根拠づけた哲学者として当時の若者に高く支持されたマルクーゼの著『エロスと文明』を取り上げ、その分析を行うなかから、この著書が、じつはフロイトの論文『文化の中の居心地の悪さ』への批判的考察という形態をとっていることに着目している。さらに論文は、マルクーゼが20世紀後半期に適用するフロイトの超自我論が、じつは超自我が父親たる個人から巨大組織に吸い上げられるという、まったく新たな段階への移行として論じられていることを指摘した。これによって性の解放そのものが、超自我を発信源に長きにわたり機能してきた西欧人の倫理観を骨抜きにすると同時に、性を解放することで、性から最後の神秘性までも奪い脱肉体化することで、すべてを商品価値に転換しうる世界を生みだしてしまった事実が判明した。これが3年間にわたり続けてきた研究の最大の成果だといえる。

性をめぐる思想と芸術を結びつけるうえで、研究最終年度においては、二つの大きな発見がみられた。それは、現代社会を、人間から肉性を奪い、プログラムされ尽くされもはや制御不能なメディア組織に呑み込んでしまったという観点から読み解いた思想家ヴィレム・フルッサーと、抑圧され不在化した肉体をテーマに表現する芸術家レベッカ・ホルン

との出会いである。現存するフルサーの資料を一手に収蔵しているベルリン芸術大学のヴィレム・フルッサー・アーカイヴに赴き、所長のジークフリート・ツィーリンスキー教授以下関係者との意見交換を行うと共に、フルッサーに関する重要な資料の収集に着手できたことは、本研究を締めくくる重要な成果だといえよう。同時に肉体が不在化した社会の中で官能性もつ可能性を追求するレベッカ・ホルンが、ドイツ、ミュンスター市に残る旧ナチ時代の監獄を舞台に創作したインスタレーション『反時計回りのコンサート』を現地に赴き視察すると同時に、作品を管理するミュンスター市立美術館の学芸員ベルント・ティア博士と意見交換を行い、美術館所蔵のホルン作品に関する貴重な資料を収集できたことも大きな成果であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 8 件)

越智和弘、「労働力均質化時代の性と文化 I. 支配文明の基本構造(1)」、『言語文化論集』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)、33巻1号、2011年、33-45、査読無し。

越智和弘、「労働力均質化時代の性と文化 I. 支配文明の基本構造(2)」、『言語文化論集』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)、33巻2号、2012年、47-60、査読無し。

越智和弘、「去勢恐怖とユダヤ人憎悪 -フロイトの超自我をめぐる系統発生的文化論」、『境界の消失と再生 - 19世紀後半から20世紀初頭の欧米文学』(平成20年度~23年度科学研究費補助金、基盤研究(B)研究成果報告書、課題番号20320054、研究代表者：西川智之)、2012年、9-30、査読無し。

越智和弘、「肉体液状化の恐怖-68年世代とナチスを結ぶファシズム身体論」、『ドイツ文学』(日本独文学会機関誌)、144号、2012年、114-131、査読有り。

越智和弘、「労働力均質化時代の性と文化 □. 性の解放と資本主義の精神 (1)」、『言語文化論集』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)、34巻1号、2012年、31-45、査読無し。

越智和弘、「労働力均質化時代の性と文化 □. 性の解放と資本主義の精神 (2)」、『言語文化論集』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)、34巻2号、2013年、33-51、査読無し。

越智和弘、「労働力均質化時代の性と文化 □. 性の思想化と脱肉体化 (1)」、『言語文化論集』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)、35巻1号、2013年、33-48、査読無し。

越智和弘、「労働力均質化時代の性と文化 □. 性の思想化と脱肉体化 (2)」、『言語文化論集』(名古屋大学大学院国際言語文化研究科)、35巻2号、2014年、21-36、査読無し。

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者 (1)

越智和弘
研究者番号：60121381

(2)研究分担者 (0)

研究者番号：

(3)連携研究者 (0)

研究者番号：